2025年3月9日  川越教会（飯能教会合同）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

人間の正解と神様の正解

［マタイによる福音書20章1～16節］

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしてはいけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

[1] 「正当な評価」（？）をしてくれと願う私たち

　今日、このようにして飯能教会と川越教会とZoomを通してご一緒に礼拝が出来ることを嬉しく思っています。コロナの前はオンライン礼拝なんて考えられなかったですが、その意味では神様は、コロナ禍という経験したことにない試練の中で、新しい道を開いて下さったのだなぁと思います。

さて今日の聖書箇所ですが、「聖書教育」の箇所からです。このところずっとマタイ福音書の中のイエス様の譬え話をピックアップしていますが、今日は20章の「ぶどう園の労働者の譬え」です。皆さん、よくご存じの譬え話だと思います。しかし、イエス様の譬え話って奥が深いなぁと思います。簡単に分かった気になってしまうことがあるのですけれども、読むたびに違った角度から教えて頂けるような気がします。私もとても全部分かったなどとは言えないのですけれども、今回読んでいて示されたことをお分かち出来たら、と思っています。

　私が今回読んでいて思ったことは、このぶどう園で早朝から働いた者たちが一デナリオン貰った訳ですけれども―それが主人との約束の金額でした―文句を言い始めたという所、これがとてもリアルだなあと思いました。私たち、この文句が分るじゃないですか。「私たちは早朝から夕方までずっと働いた。それなのに、5時から雇われた者たちと同じ金額になってしまうのか？ご主人、それはないでしょう」と思ってしまう。そのように言う権利が私たちにはあるのだということでしょう。それは「正しい主張だ」と思ってしまう。

　もしも私たちが、誰かから不当に扱われたり意味もなく軽んじられたりしたら嫌ですよね。そしてそれは辛いことです。それで心が折れて病気になることだってあります。この早朝からは働いた者たちは、自分たちのことをちゃんと主人に認めて欲しいのですね。彼らにしてみれば「正当な評価」をしてくれということ。夕方5時から雇われた者と同じ賃金だなんて、俺たちのことをバカにしているのか？と思っている。しかし、それは正しい主張のように思えますがどうなんでしょう？…彼らがなぜ不平を言い始めたかと言うと、夕方5時から雇われた者たちと同じ金額だったということを知ったからですよね。彼らは頭の中で計算を始めたんです。私たちはもっと貰えて当然だ。そうでなければ雇い主の方がおかしいと。アレアレ？ってなってきます。いつしか雇い主の方を裁いてしまっている。この「ぶどう園の雇い主」は、主なる神様のことを指しているでしょう。もし、この早朝から雇われた者たちが、ただこの雇い主・主人との関係だけを見ていたのなら、感謝こそあれ、何も不平はない筈です。彼らも5時から雇われた者と同じ、この主人に一方的に見出されて、ぶどう園に行きなさいと招かれて働くことが出来ただけなのですから。むしろ早くその働きが出来て良かった！と喜んでも良い位です。でも、ここがイエス様の譬えの鋭いところだと思いますが、同じようにぶどう園（＝神の国）に招かれているのに、私たちは、その主人（神様）との関係に生きるよりも、自分と他者と比べたがるのです。評価軸が、神様との関係ではなく、自分がどう見られるか・どう思われるかになってしまっています。そして、心がいつも揺れ動いてしまう。他人事ではないのです。私は、何かここに私たちの信仰生活や教会生活にも通じるものがあるように思えてなりません。

[2] 主の「究極の気前の良さ」を頂いて

12節の「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは」という文句の言葉は、一見正しい主張に響きますが、しかし夕方まで空しく過ごさざるを得なかった者への愛が感じられません。そうです。時に人間の「正しさ」というものには愛の欠如があります。他者を裁くことによって、相対的に自分を高める、そのような生き方に対して、イエス様は「それは違うよ」と言っておられるのではないでしょうか。私たちは気付くとこのような心になっていることがないでしょうか。

　新潟主の港キリスト教会が「合同15周年記念誌」を作られ、全国の教会に郵送して下さいました。とても読み応えのある記念誌です。特に教会員の方のお証しが30名以上掲載されていて、どのお証しも心が伝わってくるものでした。一人の方のお証しから少し紹介したいのですが、それはこの方が、本当にイエス様との出会いで心が自由にされたことが記されていたのです。佐藤さんという男性の方です。―***「2012年3月25日にバプテスマを受け、もう10年が過ぎようとしています。この世の効率主義や競争に疲れ、行き詰まっていた私は、自力で現状を打開しようともがきつつ、又心の拠り所を求め飢え渇いていました。そんな私が家の近所を歩いている時に、新潟主の港キリスト教会を見つけ、教会の門を叩き、夕礼拝から参加し始めました,教会学校で学んでいた時、一匹の羊を見っけ出すため探し回って下さる主を知り、弱い者を決して見捨てないお方、それがイエス様だと感銘を受けたあの日が、懐かしく思い出されます。主を救い主と信じ受け入れてからは、神様に委ね、重荷を下ろすことが出来るようになり、前向き且つ楽観的な人間になれました。そればかりではなく、聖書のみ言葉に照らし合わせながら、判断する訓練がされていくことによって、会社での人間関係にせよ組織の問題にせよ、物事の見方も変えられてきました。大きな組織の中で翻弄されようと、競争の中で揺さぶられようと、自分の軸は主イエス。ここに立ち戻れることは大きな幸いですし、置かれた場から逃げず、小さいことに忠実であることを大切にできるようにもなりました。そして自分の保身しか考えられない狭い枠から出て、以前の自分と同じように苦しんでいる人に、主イエスの事を伝えるために、どのように他者と関わり、声をかけていくべきか、その事に心を砕けるようにもなってきました。
「隣人を愛する」ことは、言うは易く行うは難し。それでも、自分から心を開いて行動し、福音の種を蒔いて行きたいと思います。上手く行かなくても諦めず、苦しく辛い時には神様の前に静まってみ言葉と祝福を頂き、重荷や苦しみを負いながらの日常の中でも、主を信じて何度でも立ちあがっていきたいです。」***

もう今日はこのお証しでお話を終わっても良い位です。イエス様の譬え話も、このような人生に生きることを促しておられるのではないでしょうか。そう、私たちの軸は、「大きな組織の中で翻弄されようと、競争の中で揺さぶられようと、自分の軸は主イエス」なんです。なぜでしょうか？主イエス様は、私たちがどんな時も変わらずに愛して下さるお方だから！「長く働いたから」評価するとかしないとか、そういう「計算」を主はなさいません。主は私たちが覚めていても眠っていても、変わらずに私たちの主です。私たちが人の目から見て善人であろうが悪人であろうが、それも関係ありません。天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるお方です。私たちはその究極の愛を、イエス様の十字架によって受けているではないですか！この譬え話の中で、「それともあなたは、わたしの気前のよさをねたむのか」と言われていますね。そうです、神様の正しさは、ご自分の命さえも献げる、究極の気前の良さです。そこには何の差別もありません。

　私たちは、周りの目で自分たちを評価する必要は無いのだなと思います。私たち川越教会も、また飯能教会も、人の目からみたら「小さな教会」と見られるかも知れません。でも、「だから何？」です。私たちは、皆、主が目を留めて下さって「さあ、ぶどう園で働きなさい」と声をかけて頂いたお互いですよね。それが何よりも尊いですし、それが私たち自身も、また教会そのものを支えます。本当にそうだと思います。「教会」は、天のぶどう園のひな型です。私たちはいつか行く御国で、芳醇なぶどう酒と共に、完全な主の食卓に与ることが出来る。その完全な愛の前味わいを、私たち、一人でも多くの方と分かち合うことが出来るよう、この地上のぶどう園（教会）の交わりを、主への感謝を持ちながら作って行けたらと思います。お祈り致しましょう。

主なる神様、今日ご一緒に礼拝を捧げることができる恵みを感謝します。私たちは、‟何時から”招かれたとか、そんなことが大事なのではありません。何の条件も付けず「さあ、あなたもいらっしゃい」と招いて下さるあなたの愛だけが真実です。そして、それこそが私たちを一つにしてくれます。「あなたはわたしの目には高価で貴い」。あなたに目には罪人でしかない者をそのようにみなし、なお、あなたに仕える者として造り変えて下さる神様、どうぞ私たちの心と眼差しが、あなただけを軸として生きて行けますように、常に聖霊と御言葉によってお守り下さい。感謝し、十字架の主イエス・イエスのお名前によって祈ります。アーメン。